

「美人画の雪月花 -四季とくらし 培広庵コレクションを中心に」展 作品解説

徳島県立近代美術館

■四季【春】

1 島崎柳塙(しまざき りゅうう) 「三世代婦女」
1907(明治40)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

若い娘が、桜の花簪(かんざし)を祖母の白髪にさそうとし、娘の母親はそれを優しく見守っています。明治の女性三代の穏やかなようすです。3人の着物の表現に注目すると、祖母は鮫小紋(さめこもん)に分銅繫(ふんどうつな)ぎの道行(みちゆき)コート、紅葉の帯を締めた母親は、裾に鳥の文様のある着物を着ています。娘の振袖には様々な貝が見られます。いずれも落ち着いた色彩で描かれており、八重桜の明るい色彩を際立たせています。(Y.M)

2 島崎柳塙(しまざき りゅうう) 「桜狩(さくらがり)」
1907(明治40)年 絹本着色 培広庵コレクション

同時代の女性に取材した美人画に挑戦した柳塙(りゅうう)ですが、この作品では江戸時代の外出時の女性を描いています。鳥追笠(とりおいがさ)のような二つ折りにした編笠をかぶった女性が、しだれ桜の花を振り返るようにして眺めています。着物の文様は、波に藤の房を配した華やかで大胆なもの。呉服図案の仕事をしたことがある柳塙の、文様への特別な関心がうかがえる作品です。(Y.M)

3 紺谷光俊(こんたに こうしゅん) 「知恵詣(ちえもうで)の図」
大正初期 絹本着色 培広庵コレクション

京都では、子どもが数え年で13歳になると、知恵詣、十三詣りといって嵐山の法輪寺の本尊、虚空蔵菩薩(こくうぞうぼさつ)にお詣りし、知恵を授かりに行く習わしがあります。旧暦の3月13日(今日では4月中頃)前後に行いますので、春の行事といえます。この絵の女の子は、新たに仕立ててもらった着物を着て、母親とともに参拝したようです。お寺で授かった知恵の袋を首から下げ、これから帰るところなのでしょう。(Y.M)

4 尾形月耕(おがた げっこう) 「花見うらゝか」
明治後期 絹本着色 徳島県立近代美術館蔵

桜の季節に花見をする人々の晴れやかな姿が描かれます。男性の丁髷(ちょんまげ)姿からも分かるように江戸時代の浮世絵のような舞台設定ですが、建物の柱の描写を見ると、そこには月耕が西洋美術から学

んだ遠近法や陰影表現が取り入れられています。従来にはない新たな日本画を描こうとしたこの画家ならではの作品です。(H.M)

5 楠木清方(かぶらき きよかた)「江の嶋」

1927(昭和2)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

桜を散らした小袖に花唐草文(はなからくさもん)の帯を締め、旅装で霞たなびく春の江の嶋にたたずむ女性。四国遍路がそうであるように、関東においても春先になると神社仏閣を巡る人々が増えていきます。彼女もその一人なのでしょう。鬢付(びんつ)け油で着物の襟が汚れないよう、えりあしを鶴鴿髷(せきれいたば)という旅に適した髪型に結び上げています。(H.M)

6 上村松園(うえむら しょうえん)「桜狩の図」

1935(昭和10)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

松園は、江戸時代の風俗や、その名残をとどめる京都の令嬢風俗を多く描きました。この絵の娘は、晴れ着といえる五つ紋の振袖に日傘を差して、お花見に来たようです。後に花嫁衣装となる揚帽子(あげぼうし)は、外出時に砂ぼこりから髪を守るために用いました。左のお伴の女性は、無地の縮緬(ちりめん)に黒縹子(くろじゅす)の帯、高麗屋縞(こうらいやじま)の粋な長襦袢。松園らしい明るく華やかな作品です。(Y.M)

7 岡本大更(おかもと たいこう)「三美春野(さんびしゅんや)行楽之図」

1939(昭和14)年 絹本着色 培広庵コレクション

江戸から明治初期の女性のように。手前の人、高島田の髪に桜の簪(かんざし)を挿し、市松模様に蝶の着物を着て、若々しく華やかです。その右側の女性は、梅に格子模様の裏地が見える落ち着いた色の袷(あわせ)を着ています。一番奥の女性は、眉毛がなく引眉(ひきまゆ)ですので、子どものいる既婚者なのでしょう。仲良くお花見に来た一行のようですが、一人の女性の人生を表したとする説もあります。なお、上村松園(うえむら しょうえん)が明治期に同じ構図の作品を残しています。(Y.M)

8 池田輝方・池田蕉園(いけだ てるかた・いけだ しょうえん)「お夏」

明治末頃 絹本着色 村島外三雄氏蔵

歌舞伎、浄瑠璃などで取り上げられたお夏清十郎の物語を題材にしています。大店の娘お夏と手代の清十郎は恋仲となり、駆け落ちしますが、清十郎は捉えられて死罪となり、お夏は行方が分からなくなってしまう。17世紀に実際あった話です。本作品の左幅は、髪を乱し、笠を持って裸足で歩くお夏を描いたもので、輝方(てるかた)の作。右幅は、通りかかるお夏を不審そうに見つめる村の子どもたちを、蕉園(しょうえん)が表しています。(Y.M)

9 池田輝方・池田蕉園(いけだ てるかた いけだ しょうえん) 「春秋図」

1915(大正4)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

おしどり夫婦の画家として知られた二人の合作です。江戸時代初期の風俗画から想を得たもので、右幅の春の図は男装の女性で池田蕉園(いけだ しょうえん)の作。左幅に描かれた女装の男性は池田輝方(いけだ てるかた)の作品です。やわらかな表情の人物表現は似通っていて、一つの作品として統一感を生みだしています。恋愛時代には、蕉園が輝方を慕ったようですが、作品の面では次第に輝方が蕉園の作風に近づいていったといわれています。(Y.M)

10 中村貞以(なかむら ていい) 「惜春(せきしゅん)」

1945～1954年頃(昭和20年代) 絹本着色 培広庵コレクション

春の雨に散っていく桜を惜しみながら足早に歩く、江戸時代の町娘を描いたものなのでしょう。髪は島田髷(まげ)。楓に舟をあしらった友禅の着物に、水流を図案化した藍の帯を粋に締めています。室内では着物の裾を下ろしていた時代の外出ですので、帯の下に志古貴(しごき)帯を巻いて裾をたくし上げています。(Y.M)

11 榎本千花俊(えのもと ちかとし) 「春宵(しゅんしょう)」

1923(大正12)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

春宵(しゅんしょう)とは、春の宵のこと。夜といっても、日暮れからまだ間もない時刻を含む夜中までの時間を指します。描かれているのはまだ若い舞妓(まいこ)ですので、お座敷に出るまでの間に、ついうとうとしてしまったのでしょうか。簪(かんざし)は宝船、着物は七宝文様。半衿は赤く鮮やかな藤の文様です。人物などのまわりには薄い影がつけられており、情感を強めています。(Y.M)

12 谷角日沙春(たにかど ひさはる) 「送春図」

1931(昭和6)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

帯を前で締める前帯の風習は、華やかさよりも慎ましさを好む京大阪の婚後の中年女性にもありました。しかしこの女性は前帯を垂らしており、手に三味線の撥(ばち)を持っていることから、吉原の遊女であることが推察されます。広く開けられた衿元や、少しほつれた黒髪が、さわやかな色彩の中にも官能性を感じさせます。(H.M)

13 小早川清(こばやかわ きよし) 「春日千代」

昭和初期 絹本着色 培広庵コレクション

赤い紐でつないだ小さな犬と歩く女性を表した作品です。彼女のそばでは、枝垂れ桜が美しく咲いていま

す。この絵の犬は、近世初期の風俗画に登場する洋犬に似ており、長崎の異国情緒に関心を示した画家の一面を伝えています。女性は細い帯を締め、髪は垂髪(すいはつ)ですので、戦国末から江戸初期の女性といえそうです。洋犬や装いからその時代の雰囲気伝えようとしているのでしょう。(Y.M)

14 池田輝方(いけだ てるかた) 「御代参詣(みだいさんもうで)」

1915(大正 4)年頃 絹本着色 培広庵コレクション

江戸城に仕える奥女中が、主人に代わって寺社に月詣をしているようすなのでしょう。ここは、徳川家の家紋の入った幕が張られ大きな提灯があるので、浅草寺の大門の前かもしれません。上臈(じょうろう)(上級の御殿女中)は、埃よけの揚(あげ)帽子をかぶり、刺繍の入った振袖姿。お付きの女中は、矢絰(やがすり)の着物に日傘を手にしています。江戸時代の日常を描いた作品です。(Y.M)

15 寺島紫明(てらしま しめい) 「行く春」

1950(昭和 25)年頃 絹本着色 桑田金顯氏蔵

黒いショールをはおり、パーマの髪を頭上に結い上げた、戦後しばらくの頃の女性です。桜の花びらがひとひら舞うその向こうを見る女性の視線は、どこか切なげです。くっきり表されたショールに対して、顔の表情は淡く描かれていて、心の内を想像させるところがあります。紫明はとくに戦後、同じ時代を生きる女性に取材し、生活臭や肌の温もりを感じさせる美人画を表しました。(Y.M)

16 梶原緋佐子(かじわら ひさこ) 「蝶」

1961(昭和 36)年 桑田金顯氏蔵

モダンな幾何学模様の半衿に、白地に牡丹(ぼたん)の文様の華やかな着物を身にまとう女性。緋佐子(ひさこ)は、大正期には日々の労働と暮らしに疲れた女性たちを、真実味のある特徴的な画風で表しました。しかし戦後にはそれとは打って変わり、豊満な体に流行の衣装を着た女性たちを多く描きました。そのどちらにも、画家の同性に対する共感のまなざしが注がれていることには変わりありません。(H.M)

17 廣島晃甫(ひろしま こうほ) 夕暮れの春

1920(大正 9)年 絹本着色 徳島県立近代美術館蔵

村はずれの桜の木の下で、若い女性が張ってきた母乳をしぼる姿が描かれます。そこには特別な物語が存在するのでしょうか。女性の頭上にかがやく月や、神秘的な淡い色彩によって、私たちはさまざまに想像をふくらませることができます。晃甫(こうほ)はこの作品で、第2回帝国美術院美術展覧会(帝展)において特選を受賞しました。(H.M)

解説 森 芳功(Y.M)<徳島県立近代美術館・学芸員>

宮崎 晴子(H.M)<徳島県立近代美術館・学芸員>